「おさしづ」語句の探求（2）

教義の言語的展開と「道」

おやさと研究所助教
澤井　治郎　*Jiro Sawai*

本連載のさしあたっての目標は、「おさしづ」において「道」という言葉がどのように使われているのかを明らかにすることである。そのために今回は、天理教の教義展開における「おさしづ」の位置づけ、ならびに、「道」の位置づけについて、中山正善二代真柱の「天理教教義における言語的展開の諸形態」によりながら確認することにしたい。これは1960 年にドイツのマールブルグ大学で行われた第10回国際宗教学宗教史会議（IAHR）において発表された。その冒頭で、次のように述べられている。

> 天理教の教義は、教祖のお口とお筆を通しての言語の展開によるものと、教祖の身を以てせられた手本ひながたの提示によるものとから成り立っている。所でここではこれ等のうち、前者、即ち教義の言語の展開がどのような形態をとりながらなされていったか、この点をめぐって考察してみたいと思う。（中山正善「天理教教義における言語的展開の諸形態」『みちのとも』1960 年 11 月号、7 頁）

天理教には３つの原典がある。年代順にあげると「みかぐらうた」「おふでさき」「おさしづ」である。この発表ではそれに「こふき話」を加えて、天理教教義の言語的展開の４つの形態が取りあげられている。

おふでさき

年代としては言語的に残されているもののなかで「みかぐらうた」が最初のものであるが、ここでは「おふでさき」から始められている。それは、「天理教信仰に於ける原理的、根本的な事柄は、このお筆の中に明らかに記し収められている。このおふでさきこそは、天理教の教義原典の中で最も重要なものであり、根幹をなすものである」（前掲書、8 頁）という理解からである。明治２年（1869）から同 15 年の間に教祖が「親神の啓示のまにまに、自らの手によって筆を執られ」たが、原本は 17 冊あり、合わせて 1,711 首の歌が記されており、その表紙には号数が書かれている。現在では全 17 号が一冊の『おふでさき』にまとめられている。和歌体の形式で書かれていることについては、「印象づけられるによく、心に銘記せられるに都合よい。（中略）そしてひたすら読み味わい憶念すべきものであったのだろう」（前掲書、8 頁）と、その特性がまとめられている。

みかぐらうた

「おふでさき」執筆の３年前の慶応２年（1866）から、「つとめ」の歌や手振りが教えられた。その歌が「みかぐらうた」として２番目の原典に数えられている。これも歌であることについて次のように言われる。

> 極めて民衆に親しみ易いもので、且つ馴れ覚えるに便宜なものである。格別しかつめらしくとりつくろうのではなく、極めて素朴にのび〳〵とし乍ら、その雰囲気を楽しみつつ歌い得られるものである。（前掲書、9 頁）

また、その内容は「基本的な信仰の心得を与える教示」であり、「本来つとめの地歌として勤行の中から教えの理をしみじみと、身に心につけさせるにふさわしい」と特徴を記している。

こふき話

「おふでさき」と「みかぐらうた」が整ってきたころから、教祖は側近の信仰者に対して、後に「こふき話」と呼ばれる話を繰り返し説かれたが、それは種々の「こふき話本」として残されている。その内容は、「みかぐらうた」を地歌とする「つとめ」に関わるものとして次のように説明される。

> これは前述のつとめ、特にかぐらづとめの所以を明らかにする為に語られたものであるが、そこには人間世界の始元が語られていると共に、その理に根ざして、その救済の教えが開示されたことが教えられるものである。（前掲書、9 頁）

形式としては、神の話を取り次ぐ人を仕込むために、教祖が話して聞かされたもので、逐一書き取るのではなくしっかりその話を覚えこんで、「体感を以て語り取るべきことを促された」とされている。

おさしづ

その後、明治 18 年、19 年頃から「おさしづ」として、現実的な種々の心構えを教示された。それは、信仰者が疑問に思ったり、どう行動すべきか迷ったりした際に神意を伺うものと、神の方から諭される「刻限」とに大きく分かれる。その場には、速記をする人が立ち会い、口頭で話が伝えられた後に速記を整理し、伺いに対する「おさしづ」の際は当事者に渡されたというものである。その速記された資料が集められて、現在では７巻本の『おさしづ』としてまとめられている。その特徴としては、「おさしづは謂わば補足としての教示でもある。然し日常的現実にあっては、かかる補足こそが何にもまして力強い頼りとなるものであろう」（前掲書、11 頁）と述べられている。

そして、上記４つの形態を次のごとくまとめられている。

> かくしておふでさきによって原理的規範が示され、これに先立って、みかぐらうたによって生命的教導がなされ、「こふき話」によって神秘的玄奥が語られ、おさしづによって現実的指示が与えられたのであった。（前掲書、11 頁）

「おふでさき」「みかぐらうた」「こふき話」は、いずれも覚えこむことを念頭に、教えの「根幹」、「信仰の心得」、その根元について説かれた。それに対して、「おさしづ」は覚えるというよりは参照すべきもので、いわば、教えが日常生活の様々な場面へと展開・応用されたものだといえる。

それでは、「道」についてはどうなるだろうか。この発表の最後に次のように言われている。

> 然し教義の展開そのものには、更に他の一つの形態があった。それは教祖の身を以てせられた手本ひながたの道である。（中略）ただ一言附け加えるべきことは、これ等の言語による教義展開は、一重に教祖の道すがらによる教義展開によって真に生命づけられて行ったことである。教祖は自らの教を指して、「教」というよりも好んで「道」と言われ、人々を導き化せられたのである。（前掲書、11 頁）

ここまで、教義の言語的展開について順序立てて論じられてきたが、最後に「道」に論及して発表が締めくくられている。「道」というものによってはじめて教義の言語的展開が「生命づけられ」るというのである。ここに、「道」の重要性を見てとることができる。